

# 転生者どもが夢の跡

32.56

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

転生者共が夢の跡。

思い描き、あがき、それでも届かなかった、軀の先。

異物が紛れ込もうと世界は続く。

そんな世界を覗く小説。

軽めの日常小説です。

# 目次

- 転生の回想：肉体野郎の夢の跡 0  
1  
青臭い友情：肉体野郎の夢の跡 1  
6



# 転生の回想：肉体野郎の夢の跡0

キミは

既に死んだ。

今ここにあるのは魂だ。

我はキミを転生させようと考えている。

「どうしてそんなことを!?!」

暇つぶしだ。

「て、転生つて具体的にどういう風に…」

お前たちが考えるであろうファンタジーの世界に子供として放り出す。

「当然何かあるわけだよな。

特典、いや、チートとかさ。」

与えるとも。

お前に与える権能は究極の肉体だ、

お前に与える権能は動物の統制だ、

お前に与える権能は物質の擬人化だ、

お前は——お前は——お前は——

新神暦238年4月2日

——ガルド統一帝国：中央都市——

「なあ、聞いたか？皇太子の噂」

街中で男が、

「なんでも皇太子さまが……」

女が

「カネノリ試験に出るらしいですな」

老人が

全ての人間が皇太子の話をしている。

地球―固有名詞がないため惑星名で呼ぶ―と違い、この世界では魔術と呼ばれるものが発達しており、その中に事前に用意された物語に登場人物として入り込むことができる魔術がある。

カネノリ試験とは前神暦6543年に起きたヒツト平原の戦い、その最後の四日間を再現したものを戦い抜くという試験だ。

カネノリ・ケンジは海を切った、山を持ち上げたなどの伝説に事欠かない人物であるが、事実だけを述べるならば敵軍が数万人規模の戦場を一人で抑え込み、頭を半分吹き飛ばされながらも三日三晩戦い半分以上を殺し、援軍としてやってきた敵を弓で射抜き、弓を構えたままで死ぬことで半日もの間その場に拘束した英雄である。

それ以前に正式な記録もなければそもそも正式な戸籍すら見つからない人物であり、大抵の伝説は国の威厳付けのため後に加えられた逸話である。

試験の話に戻るが、この試験は約250年の歴史の中でも16名しか合格者がいない最高級の試験であり、受けるのも難しい試験だ。

カネノリ試験は四つの重要な能力である心技体知の内、技を図る。

技を純粹に図るための試験であるため、痛みは100%カットされ、カネノリの強靱な体が用意され、敵の知略陣形はあつてないようなもの。

まあつまり地球風に言えば鬼難易度なVR無双ゲーのようなものである。

皇太子がなぜそんな試験を受けるのか。

強くなるため？名譽のため？

違う。

民衆は知らないが、全ては一目惚れした女の為。

第23妃、それが彼女の地位。

皇族に連なる者として最低限の名譽と、多大な金銭。

それを求め彼女は皇太子の父、詰まるどころ皇帝へ捧げられた。

外の憑き物を払う為に準備含めて25日、皇族へ連なるための儀式に準備含めて8

日、洗礼に4日。

彼に残されていた時間は37日だけだった。

皇帝と初夜を迎えた人間は、皇帝の所有物となる。

それを覆すことは、皇太子にはできない。

皇太子は能力もきちんとあるからと順当に皇太子になったに過ぎない。



立太子の儀も満足に終わっていない者は皇帝へ意見できる立場に居ない。

諦め、37日、無駄に過ぎすしかなかつたであろう時間。

彼一人では無駄でも、皇太子は、多くの師に恵まれた。

劍の師、槍の師、弓の師、魔術の師、歴史の師、乗馬の師、そして最初に出会つた恋  
愛の師。

皇太子は！恋の為にカネノリ試験に挑む！

## 青臭い友情：肉体野郎の夢の跡1

「ルシウス？どうしたんすか？早くいかないと間に合わないっすよ」

帝宮と太子宮の間にかかっている外廊下。

そこに二人の少年がいた。

次の授業に使う部屋までの時間などを必死に考える少年と、立ち止まり、一人の少女を見続ける少年。

「ルシウス！眺めてたって何にもならないじゃないっす、ほら、授業行くっすよ！」

声をかけている少年の名はアルトウル・スノ・バリアウス。

赤みがかった茶色の髪に、少し日焼けした肌、金と呼ぶよりは原色に近い黄色の瞳が特徴のバリアウス侯爵家の次男で皇太子の友人兼お付きだ。

そして、立ち止まっている少年の名はルシウス・パキ・マウル・ジェーンドラム・ガルド。

銀に近い金色の髪と、白い肌に、緑色の瞳のガルド統一帝国、皇位継承権第一位、真正銘の皇太子だ。

ルシウスは授業に向かわなければならないにも関わらずに少女を眺めるのに夢中に

なっていた。

少女の名はカレナⅡサンディアス。

属国であるサンディアス王国領の王女であり、皇帝へ23番目に嫁いだ妃である。

艶やかな長い黒髪に、蕩けるような褐色の肌、突き刺さるように真っ赤な瞳。

彼は、一目見ただけで彼女に惹かれた。彼女を欲した。

結局この日、ルシウスはアルトゥルに引きずられ授業へ向かったが、思い浮かぶのはカレナの事ばかり。

彼は度重なる無視によって、不興を買ったかと気の弱い講師をひたすら恐怖させる事になった。

翌日のこと。

その日は休養日であり、アルトゥルに遊びへ誘われていた日だった。

しかし、一目惚れの衝撃は大きく、ルシウスは話すこともなくただぼーっとしていた。「いいかげんにするつすよ！惚れた腫れたで何にも手につかなくなるガキじゃダメなんすから！」

アルトゥルが彼を嗜めるが、ルシウスはそれを気にも止めず返答する。

「しかし…：彼女は本当に本当に美しいんだ。」

私の貧相な語彙では彼女をたたえる事が出来ない。」

「ベタ惚れじゃないっすか!？」

ツツコミながらも、アルトウルは思考していた。

(これはまずいかもしれないっす。

これが魅了魔術なら最悪、騎士や侍女は既に敵の手に落ちてるかもしれないっす。

相談するなら魔術への防備の強いタカモトさまっすかね…)

「…そういえば、タカモト様に用事があつたんす、一緒に行かないっすか?」

「いきなりだな…まあわかった、行こう。」

アルトウルは、カレナの話題を意図的に避け、怪しまれないように雑談をしつつ再び思考を巡らせていた。

すんなりいきすぎじゃないのか、術者がそれだけ魔術に自信があるんじゃないのか、タカモトも既に魅了されているのではないか。

考えれば考えるほど悪い方向に向かっている。

それを理解していた彼は、皇帝の守りを任されているタカモトが魅了されていれば皇帝が魅了されたも同然であり、降伏するしかない、と強引に思考を終わらせた。

しかしながらルシウスは完全にただの一目惚れであり、魔術など無しに魅了されているだけであり、アルトウルの思考は完全な取り越し苦労である。

カレナちゃんは美少女だからね！仕方ないね！

そうこうしている内に宮廷魔術師であるタカモトへ貸し出されている部屋にたどり着いた二人。

ぼーっとしているルシウスへ少し話があるから待っていてくれと告げ、アルトウルは部屋に入った。

4代目ユウナ・タカモト。

性別：女性、髪色：金、肌色：白、瞳色：灰色。

年齢は今年で52歳、見た目の全盛期はどうに過ぎても、魔術の全盛期は未だ更新中の女傑だ。

「スノ・バリアウスじゃないか。

実験で危険な時もあるからちゃんとノックはしな。

それで一体どうしたんだい？」

部屋へ入ってきたアルトウルに気づき、何かを作っていたらしい手を止め、タカモトがそう告げる。

「緊急事態かもしれないんす、実はつすね…」

アルトウルは、皇太子ルシウスの行動がおかしい、魔術がかかっていないか確認して欲しいとタカモトへ依頼する。

もう一度言うが行動がおかしいのはルシウスの素である。

その依頼を受諾したタカモトはルシウスを拘束し、精密検査を行った。

一時間半もの時間をかけた結果、タカモトは結果をアルトウルとルシウスに語る。

「恋煩いだね、惚れるのは良いがあんた自分が皇太子だつて忘れるんじゃないよ。」

「タカモト先生…その皇太子を長時間拘束しておいて言うことがそれですか…」

縛られたままのルシウスが、恨めしそうにタカモトへ語り掛ける。

それを受け流し、タカモトはいけしやあしやあと答える。

「皇太子のお目付け役のバリアウス侯爵家からの話だ、無下にして本当だったら困るだ

ろう？」

それに、もし何かあつても怒られるのはスノ・バリアウスであつてあたしじゃあないからね。」

それに対して文句を言おうとしたルシウスだったが、邪魔だから出て行けと、アルトウルとともに追い出される。

「まあ…、つまり本気で惚れてるって事っすね…」

アルトウルがしみじみと呟く。

「…そうだ、お前が魅了されていると感じるほどに私は彼女に好意を抱いている。

だが…彼女は父上の物だ。」

「この感情は報われないものだろう。」

「ふーん、諦めるっすか？」

「ああ、そうだ。」

「諦める。」

「わかったつす。」

「とりあえず二つ言いたい事があるんで歯を食いしばつてもらつていいっすか？」

「一体何ぐあ！」

アルトウルは、ルシウスへ一言警告すると、思いつきり右頬をぶん殴つた！

「人は……物じゃないっすよ。」

床に転がり、痛みに悶えるルシウスへ冷たく語り掛ける。

「そんな考え方をする人間の感情なんて報われなくて当然っすね。」

ルシウスは、温度などないはずの視線に冷気を感じた。

それほどの感情がこもつた視線だった。

「確かに……そうだ、私が間違つていた。」

罰を受けることを承知で殴つたアルトウルの気持ちだが、ルシウスにはよくわかつた。

「こんな事だから、私には友人もできず、婚約者もできないのかもしれない。」

「もう一回殴りたいならそう言ってくればいくらでもやるっすよ。」

アルトウルが左手を構える。

さすがに二度殴られるのはごめんだと慌ててルシウスは否定する。

「まったく、俺が友達だと思われてないとか心外っすね。」

アルトウルは不機嫌そうにつぶやいた。

ルシウスは自分の発言を振り返り、また慌てて否定する。

「ち、違う！これは言葉のあやであってお前を友達と思っただけじゃない、というか私が自分で作れないという話というか」

「大丈夫っすよ、わかってるっすから。」

だから、俺は友達として言うっす。

その考え方矯正して、ルシウスがあの子を振り向かせるっすよ！」